

沖 手 遺 跡

ホームプラザナフコ益田北店開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月

益田市教育委員会

沖 手 遺 跡

ホームプラザナフコ益田北店開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



中国五県土地・租税資料文庫美濃郡久城村地図（広島大学図書館所蔵）

序

本報告書は、益田市教育委員会が平成25年8月から11月にかけて実施した、ホームプラザナフコ益田北店開発事業に伴う沖手遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

沖手遺跡は、今回の発掘調査を含め11次にわたる発掘調査が実施され、その成果によって11世紀から12世紀にかけて繁栄した中世の大規模な集落遺跡で、日本海や高津川・益田川の水運を利用した物資の流通・集散の拠点であったことが明らかにされています。中須東原遺跡に代表される中世港湾遺跡の発見が河口域で相次いだことにより、中世の益田が交易流通に密接に関わる重要な地域として全国的に注目を集める中、益田平野でいち早く成立した沖手遺跡の再評価もなされつつあります。

本書が皆様に広く活用され、地域の歴史や遺跡保護に対する理解と関心を深めていただく一助となれば幸いです。

調査にあたって多人なご協力をいただきました株式会社ナフコをはじめ、土地所有者、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

益田市教育委員会

教育長 村川 修

例 言

1. 本書は平成 25 年度に益田市教育委員会が株式会社ナフコの委託を受けて実施したホームセンターナフコ益田北店開発事業に伴う沖手遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査に要する経費は、事業者 株式会社ナフコが全額負担した。
3. 調査組織は次のとおりである。
 - 【調査主体】 益田市教育委員会
(事務局：益田市教育委員会 文化財課)
 - 【調 査 員】 長澤和幸 (主任)
佐伯昌俊 (主事)
 - 【調査補助】 世良 啓 (嘱託職員)
寺戸淳二 (嘱託職員)
 - 【調査指導】 島根県教育委員会
4. 現地調査及び報告書作成に際しては、以下の機関、方々からご指導・ご助言をいただいた。
田中義昭 (いななか舎 代表)、中村唯史 (島根県立三瓶自然館)、西尾克己 (大田市教育委員会)、橋本久和、村上 勇 (益田市文化財保護審議会会長、奥田元宋・小由女美術館館長)、国土交通省浜田河川国道事務所益田国道維持出張所、島根県教育委員会文化財課、益田市文化財保護審議会
5. 発掘調査作業及び整理作業には下記の方々に参加していただいた。
 - 【発掘作業】
麻生時夫、石川嶺生、可部秀治、亀山武徳、川崎育子、河野正幸、齊藤豊、佐々木直人、佐藤泰彦、高松信自、武田爲久、寺戸悟、西坂松子、羽板和良、牧原正明、椋悟、村上博一、安野和男、山根定男、横田幸和
 - 【整理作業】
岡崎敦子、西坂松子、横山秀美
6. 挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標 X 軸の方向を指す。また、平面直角座標系 X Y 軸は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
7. 本報告書の執筆・編集は、文化財課嘱託職員 三浦竜之介の協力を得て、佐伯が行った。
8. 本書に掲載した出土遺物及び実測図、写真等は益田市教育委員会文化財課で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 発掘調査の概要	3
第1節 調査区設定と遺構の分布状況	3
第2節 中世以前の遺構・遺物	13
1. 集石遺構	13
2. 溝状遺構	13
第3節 中世の遺構・遺物	17
1. 溝状遺構	17
2. 方形竪穴上坑	24
3. 集石遺構	24
4. 土坑	26
5. その他の遺構共伴及び遺構外出土遺物	26
第4節 近世の遺構・遺物	28
1. 溝跡・道路状遺構	28
第4章 総括	32
第1節 弥生時代の沖手遺跡周辺について	32
第2節 中世の沖手遺跡について	32
1. 遺構について	32
2. 遺物について	34
第3節 近世の沖手遺跡—浜田藩寺福地浦番所について—	36
第4節 調査地点の位置付け	36

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第19図	広告塔・灯油タンク中世遺構平面図 ・断面図及び出土遺物	23
第2図	沖手遺跡の範囲と周辺の主な遺跡	2	第20図	SX26 遺構平面図	24
第3図	沖手遺跡調査区配置図	4	第21図	SX27 遺構平面図及び出土遺物	24
第4図	調査区配置図	5	第22図	SX6 遺構平面図及び断面図	25
第5図	沖手遺跡の基本層序と遺構の関係 模式図(南北ライン・東西ライン)	6	第23図	SX28 遺構平面図及び断面図	26
第6図	土層断面図(基礎部分①)	7	第24図	その他中世遺構共伴遺物	27
第7図	土層断面図(基礎部分②)	8	第25図	その他中世包含層出土遺物	28
第8図	土層断面図(基礎部分③)	9	第26図	SD1・2 遺構平面図及び近世溝出土 遺物	29
第9図	上層断面図 (広告塔・灯油タンク部分)	10	第27図	広告塔・灯油タンク近世遺構 平面図及び断面図	30
第10図	調査区全体平面図	11・12	第28図	広告塔・灯油タンク包含層出土 遺物	31
第11図	集石1・2平面図	14	第29図	中世遺構面全体図	33
第12図	調査区31～33区溝状遺構SD5・6 ・7・8	15	第30-1図	出土遺物の種別構成比	35
第13図	調査区32SD7 遺物出土状況	16	30-2図	貿易陶磁器の種別構成比	35
第14図	区画溝遺構平面図及び断面図①	18	30-3図	国産陶器の種別構成比	35
第15図	区画溝遺構平面図及び断面図②	19	第31図	沖手遺跡の貿易陶磁器時期別出土 比率	36
第16図	その他中世遺構平面図	20			
第17図	区画溝出土遺物	21			
第18図	区画溝出土遺物	22			

挿表目次

第1表	沖手遺跡調査年次一覧	3	第2表	沖手遺跡出土遺物集計表	34
-----	------------	---	-----	-------------	----

巻頭図版目次

巻頭図版1 明治初期の久城村地引図

第1章 調査に至る経過

益田市教育委員会では、周知の埋蔵文化財包蔵地沖手遺跡（遺跡番号Q271）および専福寺跡（遺跡番号Q94）の範囲内で計画された開発事業に関し、事前発掘調査の実施について事業者と協議を進め、島根県教育庁文化財課からの指導・助言を踏まえ、遺跡が直接影響を受ける建物基礎と広告塔、灯油タンク埋設部分の890㎡を調査対象とすることとなった。

事業者からは平成25年3月1日付けで文化財保護法93条第1項に係る埋蔵文化財の届出が提出され、平成25年4月25日付けで益田市教育委員会から島根県教育委員会に対して埋蔵文化財発掘通知を提出した。さらに、益田市と事業者との間で平成25年8月1日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同日より現地調査に着手し、同年11月22日には調査を終了した。

その後の遺跡の取り扱いに関しては、遺跡が影響を受ける範囲は記録保存のための調査が実施され、かつ遺跡の残存部分は盛上で保護される事業計画であり、工事の実施は止むを得ないとの判断に立ち、平成25年11月22日付けで益田市教育委員会から島根県教育委員会に対して遺跡の取り扱い協議を行った。これについて平成25年11月27日付けで島根県教育委員会から益田市教育委員会に対して回答があり、事業者へ取り扱いに係る協議結果を通知している。

なお、平成25年9月5日に東山信治（島根県教育委員会文化財課）、平成25年9月27日に椿真治（島根県教育委員会文化財課）、平成25年10月29日と11月18日に東山信治（島根県教育委員会文化財課）、平成25年9月13日と11月1日の2回に渡り益田市文化財保護審議会（会長 村上勇）の現地視察・調査指導会を実施した。さらに、地質の観点から見た沖手遺跡の立地に関して、平成25年11月6日に中村唯史（島根県立三瓶自然館）による調査指導会を実施した。

調査成果の公開のため、平成25年11月17日に現地説明会を開催し、市民60名の参加があった。



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

沖手遺跡は島根県益田市久城町に所在する。現在は久城インター線と市道中吉田久城線が遺跡中心部を通り、周辺は水田として利用されている。かつて河口部には潟湖が存在し、広範囲に後背湿地が広がっていた。益田川と高津川の度重なる氾濫によって土砂の堆積が進み、潟湖に面して形成された自然堤防の微高地上に遺跡は立地する。遺跡南側は古代寺院「専福寺」の伝承地とされ、近世においては浜田藩益田組専福寺浦番所が置かれ益田七浦の浦事務を掌握していた。

遺跡に程近い益田川の河口部右岸の丘陵上には式内社櫛代賀姫神社が鎮座し、廃寺となった別当寺真如坊(益田上本郷勝達寺の分坊)には建長七年(1255)在銘の重文阿彌陀如来立像が旧蔵されていた。沖手遺跡よりさらに河口に近い益田川左岸の中須地域では、中世後期に最盛期を迎える船着場跡(礎敷き遺構)を備えた港湾遺跡中須東原・西原遺跡が発見されている。沖手遺跡から中須東原・西原遺跡へと変遷した港湾施設の機能は、土砂の堆積による陸地化の影響から、より流勢の安定した上流へと移り、益田本郷に対する新たな市場として今市が戦国時代に整備され、益田氏の須佐移封に伴って17世紀初頭に終息した。



1. 沖手遺跡
2. 中須東原遺跡
3. 中須西原遺跡
4. 中世今市遺跡
5. 平田遺跡
6. 式内社櫛代賀姫神社
7. 真如坊跡
8. 福王寺
9. 安福寺跡
10. 恵比寿神社
11. 雪舟の墓

第2図 沖手遺跡の範囲と周辺の主な遺跡

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区設定と遺構の分布状況

調査対象地は、鳥根県益田市久城町21番3ほかの所在し、主に開発区域北側に「沖手（おきて）」、南側に「専福地（せんぶくち）」の字名が残る。南側に接する今市川は、昭和10年代の河川改修以前の益田川の本来の河道である。調査面積は、土壌の柱状改良によって遺跡が直接影響を受ける建物基礎部分48箇所と広告塔・灯油タンク埋設部分の890㎡となった。

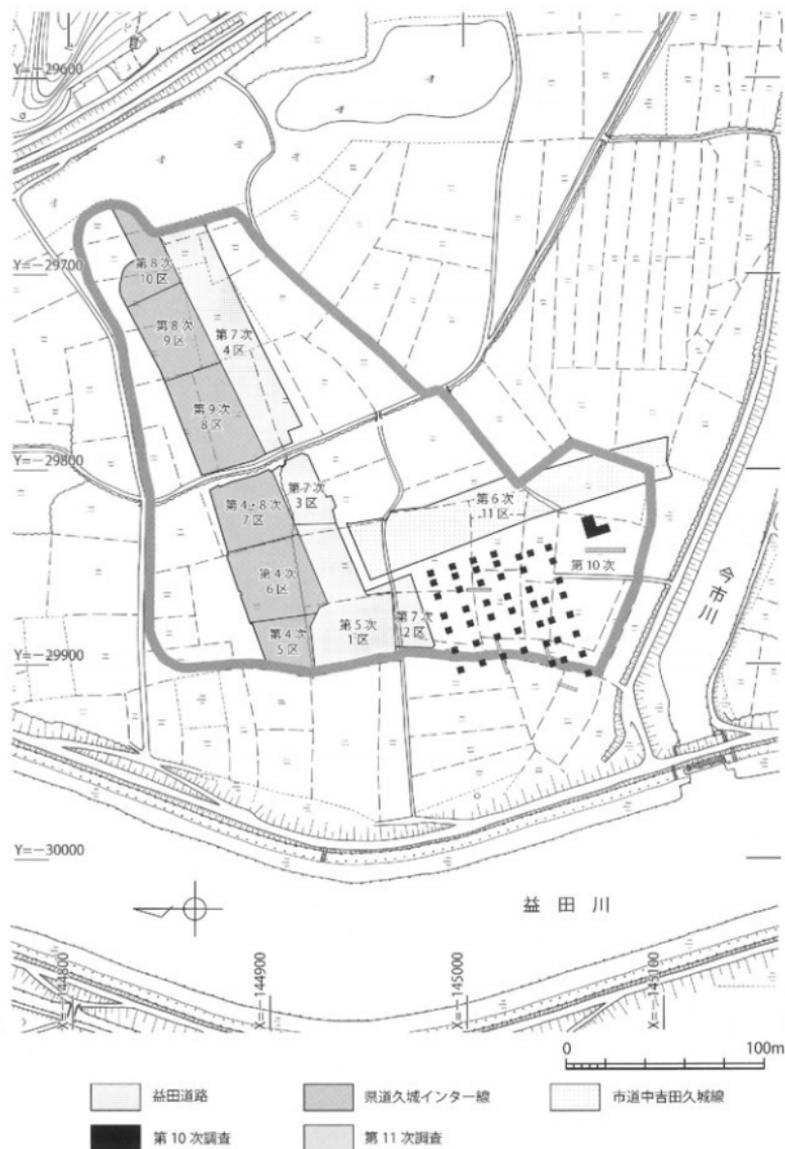
調査区の設定にあたっては、建物基礎部分は北西端上段の西から東へ各段ごとに番号を付し、最終的に0～47区を設定した。広告塔・灯油タンク部分は隣接することから、L字状に調査区を接続させる形で設定した。広告塔・灯油タンク部分は90㎡の面積を有し、今回の調査対象地内では最大の調査区となった。この部分は寺院地名「専福地（寺）」に含まれ、その存在が注目されたが、今回の調査においても、既往の調査成果（第6次調査）と同様に、寺院に直接関連する特別な遺構・遺物は確認されていない。

なお、沖手遺跡における調査区の呼称は、県道久城インター線、益田道路、市道中古田久城線建設予定地内において、鳥根県教育委員会・益田市教育委員会の両者で共通した1～11区の調査区名を配している。しかし、道路建設予定地以外の遺跡範囲部分については共通した調査区の設定がなされていない。

本報告書においては、区画溝をはじめとする既往の調査成果との比較検討の必要性に加え、今後予想される沖手遺跡内での発掘調査に対応するため、鳥根県教育委員会・益田市教育委員会が実施した既往調査を調査年次ごとに整理した（表1）。以下、本文中においてはこの調査回数に従って記述することとする。平成10年度に益田市教育委員会が実施した試掘調査（8箇所）を第1次調査として、同一年度内に複数の調査が実施されている場合には調査開始日を基準に整理を行っている。今回の発掘調査は第10次調査として実施した。

第1表 沖手遺跡調査年次一覧

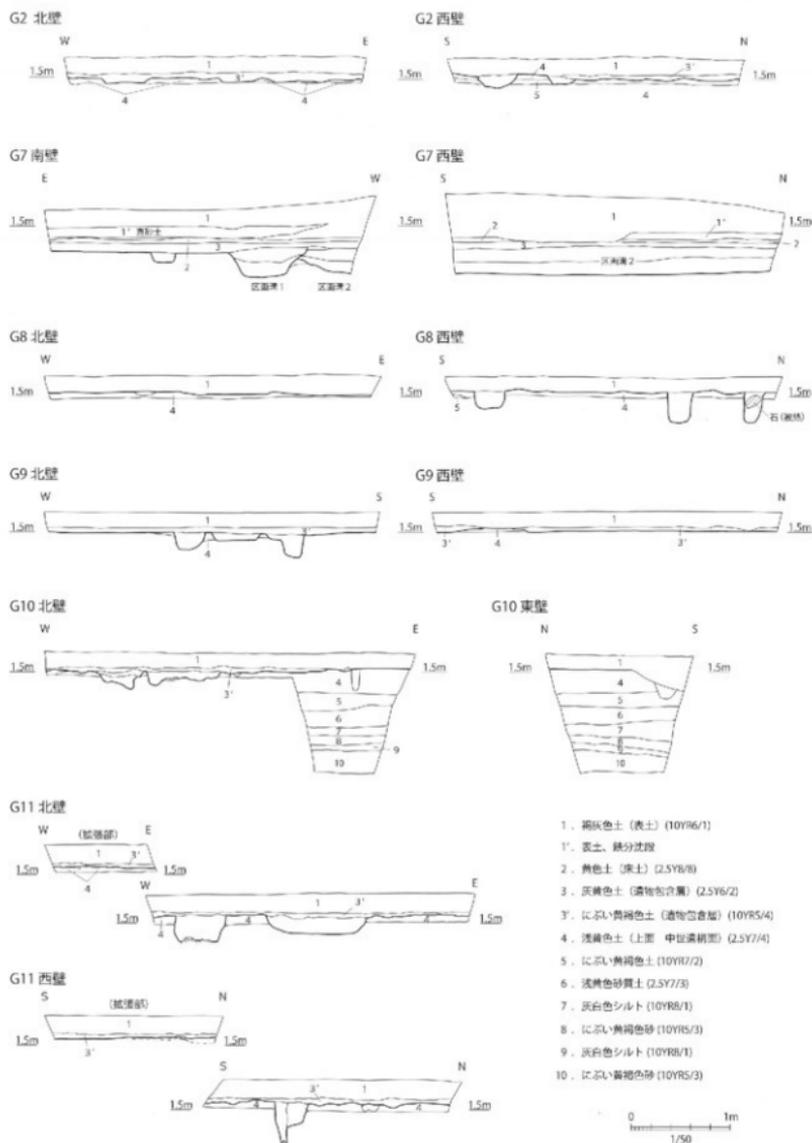
調査年	調査次	調査主体	調査原因	調査地点	調査期間
1998	第1次調査	益田市教育委員会	遺跡の有無確認のための試掘調査(8箇所)	—	1998.10～
1999	第2次調査	益田市教育委員会	遺跡の有無確認のための試掘調査(42箇所)	—	1999
2002	第3次調査	益田市教育委員会	県道久城インター線予定地における遺跡の範囲確認調査(11箇所)	—	～2002.12
2004	第4次調査	益田市教育委員会	道路建設(県道久城インター線)	5・6・7区	2004.05～2005.02
	第5次調査	鳥根県教育委員会	道路建設(益田道路本線部分)	1区	2004.09～2004.12
	第6次調査	益田市教育委員会	道路建設(市道中古田久城線)	11区	2004.11～2005.08
2005	第7次調査	鳥根県教育委員会	道路建設(益田道路本線部分)	2・3・4区	2005.04～2005.12
	第8次調査	益田市教育委員会	道路建設(県道久城インター線)	7・9・10区	2005.07～2006.03
2006	第9次調査	益田市教育委員会	道路建設(県道久城インター線)	8区	2006.04～2006.07
2013	第10次調査	益田市教育委員会	民間開発事業に伴う発掘調査	0～47区 広告塔・灯油タンク	2013.08～2013.11
2013	第11次調査	益田市教育委員会	遺跡の範囲・内容確認に伴う調査(6箇所)	—	2013.10～2013.11



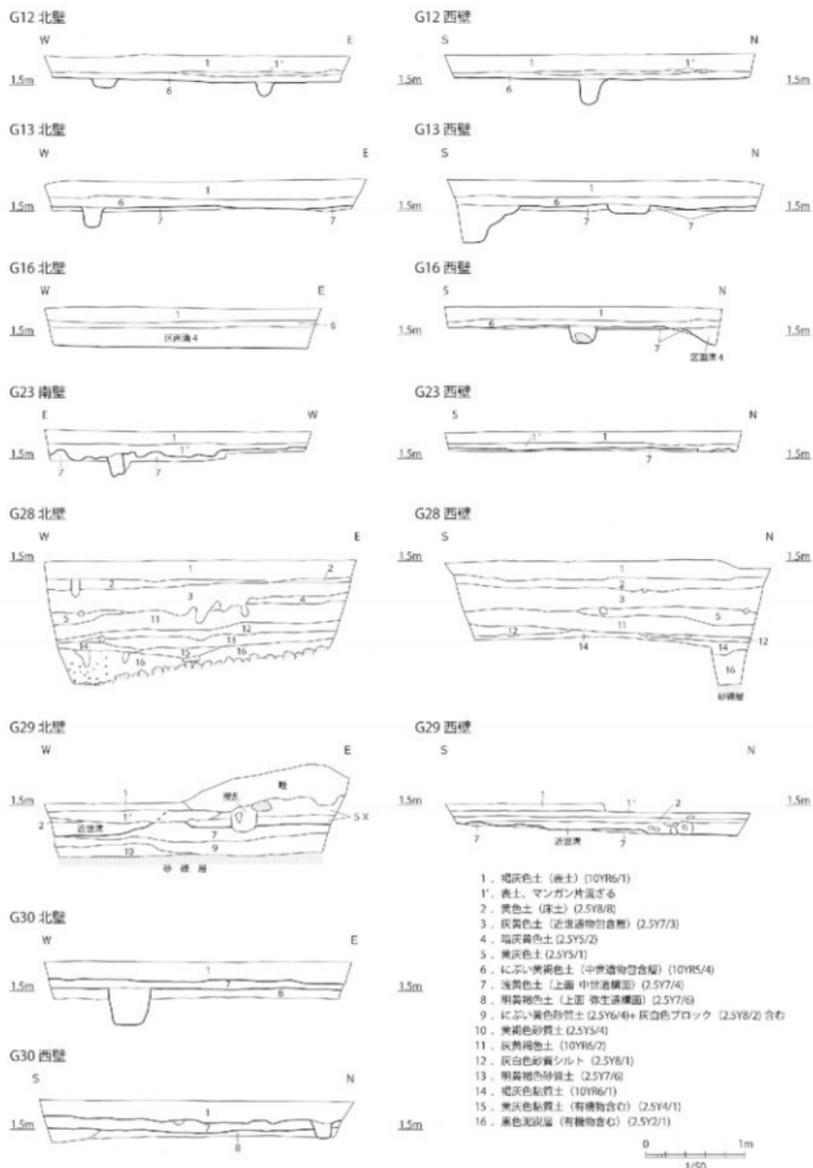
第3図 沖手遺跡調査区配置図 (S=1/2,500)



第4図 調査区配置図



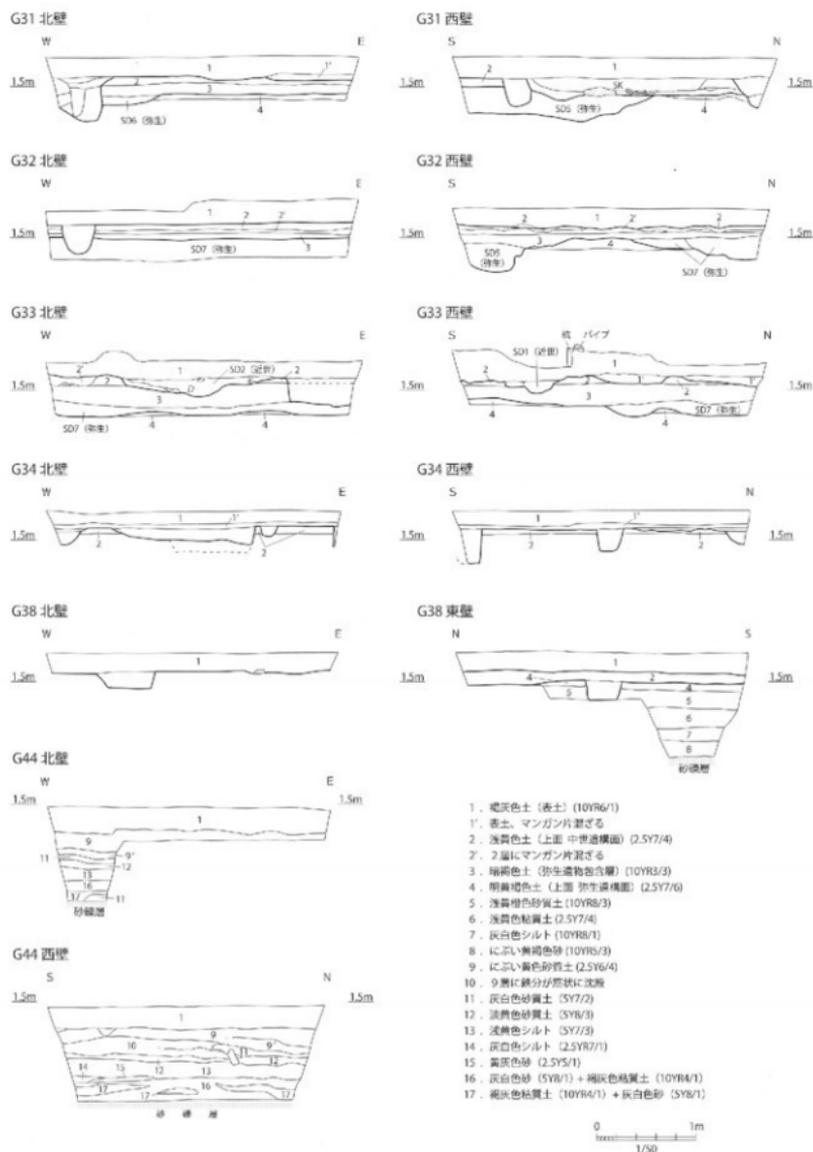
第6図 土層断面図 (基礎部分①)



1. 褐灰色土 (黄土) (10YR6/1)
- 1'. 表土, マンガン片混ざる
2. 灰色土 (塚土) (2.5YR/6)
3. 灰黄色土 (近世遺物包含層) (2.5Y7/3)
4. 灰黄色土 (2.5Y5/2)
5. 黄灰色土 (2.5Y5/1)
6. 濃い黄褐色土 (中世遺物包含層) (10YR5/4)
7. 黄褐色土 (上面 中世遺物層) (2.5Y7/6)
8. 明黄褐色土 (上面 近世遺物層) (2.5Y7/6)
9. 濃い黄褐色土 (2.5Y6/4) + 灰白色ブロック (2.5Y8/2) 含む
10. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/4)
11. 灰黄褐色土 (10YR6/2)
12. 灰白色砂質シルト (2.5Y8/1)
13. 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6)
14. 褐灰色粘質土 (10YR6/1)
15. 黄灰色粘質土 (有機物含む) (2.5Y4/1)
16. 黒色泥炭層 (有機物含む) (2.5Y2/1)

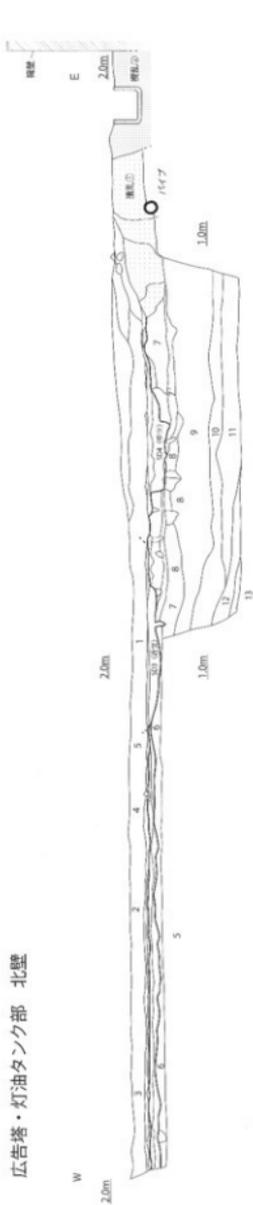


第7図 土層断面図 (基礎部分②)



第8図 土層断面図 (基礎部分③)

広告塔・灯油タンク部 北壁



広告塔・灯油タンク部 西壁



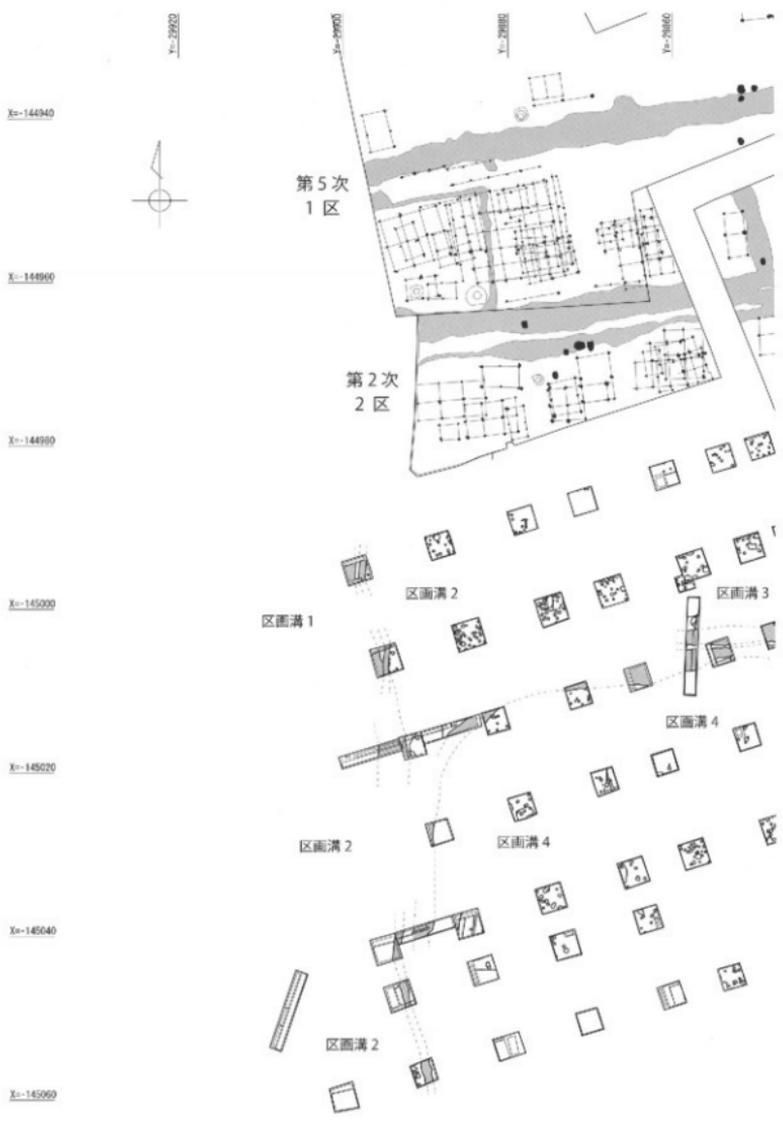
1. 黄灰色土 (硬土) (D5Y51)
2. 黄灰色土 (D5Y51) + 黄褐色土 (5YR3/4)
3. 明赤褐色土 (5YR5/6)
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
5. 褐色土 (10YR5/1)

6. 濃い黄褐色土 (10YR5/4)
7. 淡黄色砂質土 (5Y7/4)
8. 灰白・褐色土 (10YR5/4)
9. 褐色砂質土 (7.5YR4/3)

10. 明赤褐色砂質土 (D5Y5/6)
11. 明赤褐色砂質土 (5YR5/6) + 灰白色砂 (5Y7/1)
12. オリーブ黄褐色土 (5Y6/3)
13. 褐色砂質土 (7.5YR4/1)



第9図 土層断面図 (広告塔・灯油タンク部分)



第10図 調査区全体平面図 (S=1/600)

第2節 中世以前の遺構・遺物

1. 集石遺構

調査区 14 では 2 箇所で集石遺構が確認されている。いずれも中世以前の河川活動によって形成された小礫を中心とする砂礫層の上面で検出されており、下層の礫との相違や被熱を受けていることから人為的な遺構と考えられる。集石 1・2 ともに遺物を伴っておらず、性格・時期ともに不明である。

集石 1 (第 11 図)

調査区 14 の北東隅に位置する。集石が確認できた範囲は部分的で、0.7m×0.7mの正方形を呈した範囲に角礫、円礫が比較的高い密度でまとまっていた。10cm 大の礫が中心で、火を受けた石 5 個を含むが特に遺物は伴っていなかった。

集石 2 (第 11 図)

調査区 14 の南西隅に位置する。確認された集石の範囲は 0.55m×0.6mである。10cm 前後の礫が中心であるが、集石 1 に比べると角礫が多く含まれる。火を受けた石 6 個を含み、高温によって割れた石もみられる。

2. 溝状遺構

第 1 章 1 節で若干ふれたが、中世の遺構の調査を終えた段階で下層確認のためのサブトレンチを設定したところ、調査区 24、30～33、38 において弥生土器と溝状遺構が確認されたため、面的な調査をすることとした。

SD5(第 12 図)

SD5 は幅 1.3m(南壁までの暫定値)、深さ 50cm の比較的深い溝状遺構で、調査区 31 と 32 の南端を東西方向に連続する形で確認された。遺構の覆土は黒褐色土(10YR3/2)を呈し、にぶい黄褐色ブロックを斑状に含んでいる。弥生土器小片が出土している。

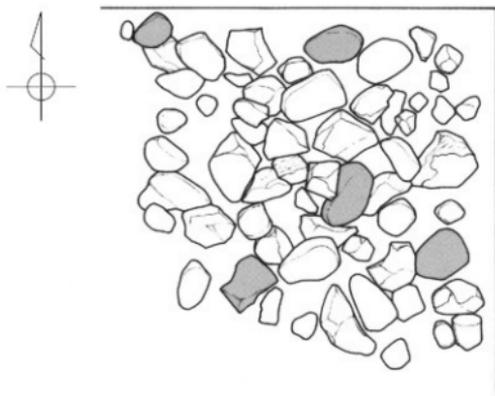
SD6(第 12 図)

SD6 は調査区 31 を南北方向にのびるもので、幅は約 80cm(西壁までの暫定値)、深さ約 20cm で、断面形は浅い皿形を呈している。南側は南西端で SD5 に切られており、北側は調査区外につづく。遺構の覆土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、遺構に伴う遺物は出土していない。

SD7(第 12・13 図)

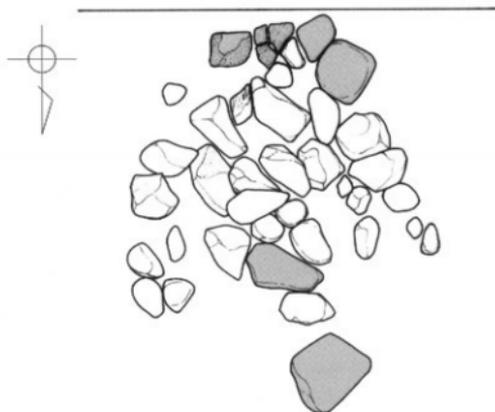
SD7 は幅 1.4m(北壁までの暫定値)、深さ 30～50cm の断面形が皿状のもので、調査区 32 から 33 にわたって東西方向にのびるものである。この遺構の覆土は灰黄褐色土(10YR5/2)を呈し、調査区 33 南東端で SD8 によって切られている。

調査区 32 SD7 から弥生土器が出土した(第 13 図)。1 は IV-2 もしくは V-1 様式の甕で、口径 15.8cm(復元)、頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部に 2 条の凹線文が施される。内面は頸部以下をヘラケズりする。2 は V-1 様式のもので、口径 20.0cm(復元)、ほぼ直立して立ち上がる複合口縁を有し、2 条の凹線文が施される。出土遺物から、SD7 は弥生時代中期末から後期初頭の遺構と考えられる。

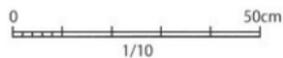


集石1

(網かけの石は火を受けた石)

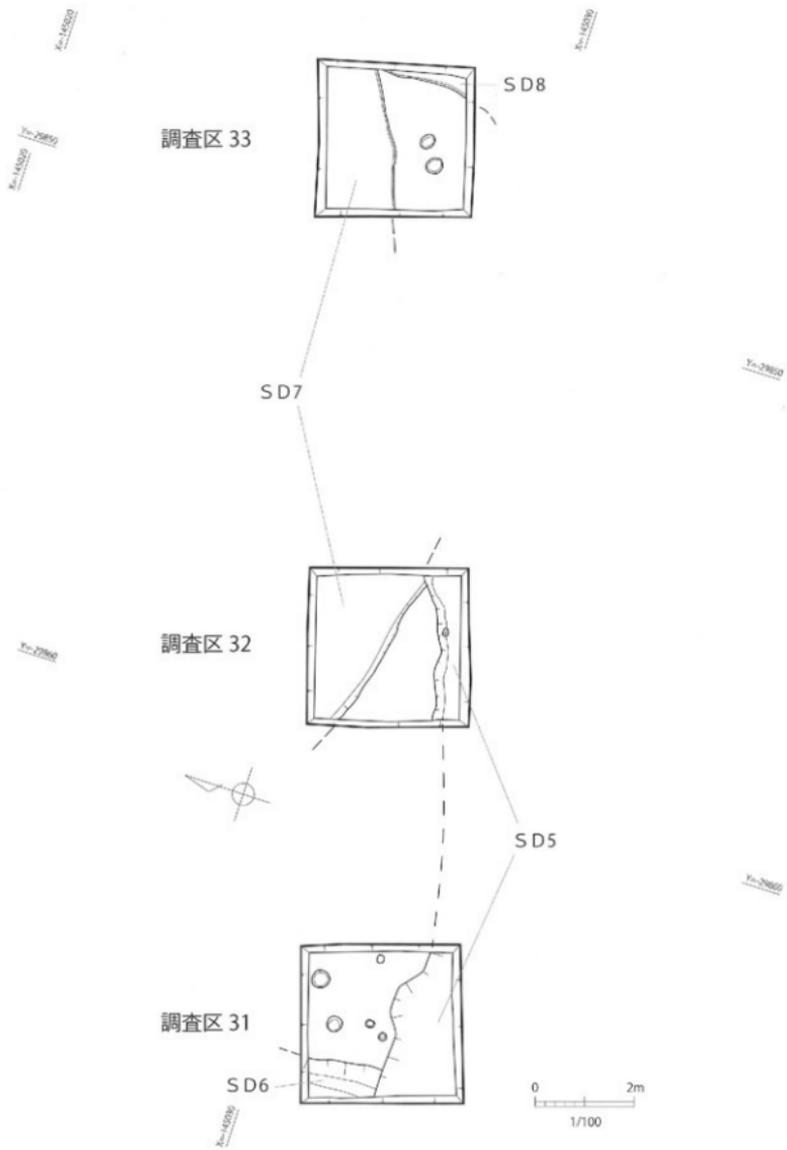


(網かけの石は火を受けた石)



集石2

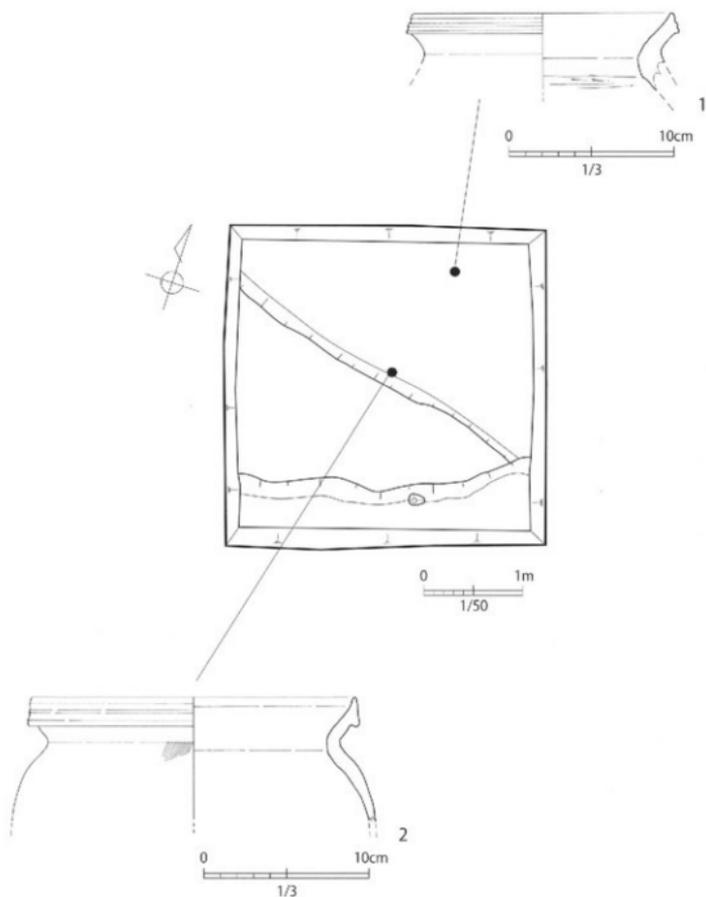
第11図 集石1・2平面図



第 12 図 調査区 31～33 区溝状遺構 SD5・6・7・8 (S=1/100)

SD8(第12図)

SD8は調査区33区南東端を南北方向にのびるもので、SD7を切って掘り込んでいる。幅30cm(暫定値)、深さ20cm(暫定値)である。遺構の覆土は黒褐色土(10YR3/2)を呈し、断言はできないものの埋土と遺構の形状などからSD5と同一遺構である可能性も考えられる。



第13図 調査区32 SD7 遺物出土状況

第3節 中世の遺構・遺物

1. 溝状遺構

沖手遺跡では既往の調査により、東西南北の方位に合せて掘られた溝状遺構が遺跡全体を区画していることが知られ、基本的に2本の間に一定幅の平坦面をもちながら平行して走る状態で検出されている。

これらの溝状遺構は区画を目的とした区画溝と考えられるが、断面が浅い皿状を呈するものについては道路遺構としての性格も指摘されている。

区画溝1(第14・17図)

区画溝1は、調査区7を水田の畦畔に沿って南北方向に直線的にのびるもので、区画溝2を掘り込む形で交差し、南北とも調査区外へつづいている。

幅は75cm、深さは30cm、断面形は逆台形を呈し、1層(暗灰黄色土2.5Y5/2)と2層(黒褐色粘質土2.5Y3/1)に分層される。

第17図は区画溝1から出土した遺物である。1～2は調査区7から出土した。1は褐釉陶器の壺である。2は砂岩製の砥石で、中砥と考えられる。

区画溝2(第14・17図)

調査区0、7、14、28で検出された一連の溝跡で、調査対象地西端を南北方向にのびる区画溝と考えられる。調査区14と21付近で、東西方向にのびる区画溝4と平行する形で南下する。区画溝2は、幅1.0m～1.5m、深さ20～25cm程度、断面形は浅い皿状で、南下するほど幅が狭くなる傾向にある。覆土は、褐灰色土(10YR4/1)で、下層に灰黄色土ブロック(2.5Y7/2)が混じる。

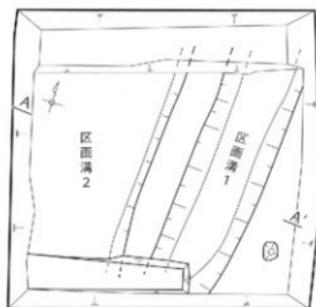
区画溝2からの遺物は、貿易陶磁器が豊富に出土している(第17図)。7・9・12・14は調査区0、8・10・13・15・16・17は調査区7、11は調査区14から出土した。7は土師器皿、8は土師器杯である。9～11は白磁碗で、いずれもⅣ類に分類される。12～14は青磁碗で、12は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。13は口縁部が外反し、13・14ともに体部外面にやや幅広い縦櫛目を施す。同安窯系青磁碗Ⅰ類もしくはⅢ類と考えられる。15～17は東播系の須恵器である。15・16は捏鉢で、内面に摩耗が認められる。17は裏で、外面をタタキ調整とする。

区画溝3(第15・17図)

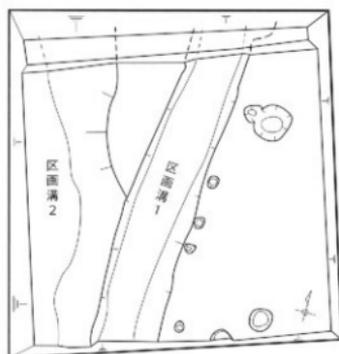
調査区18、19、20を東西方向にのびる2本の区画溝のうち北側に位置し、東側は第6次調査でその続きが確認されている。調査区20で確認された区画溝3は、第6次調査で検出された溝3・4との合流点と考えられる。幅2.5m、深さ15cm、断面形は浅い皿状である。覆土は、にぶい黄橙色土(10YR7/3)である。

区画溝検出時には上面に石列が確認され、17世紀中頃～後半にかけての近世陶磁器が出土した。

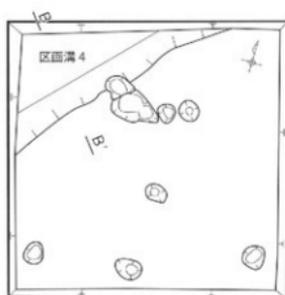
第17図は区画溝3の出土遺物である。3は調査区19から、4～6は調査区18からの出土である。3は古瀬戸後期Ⅲ期の平碗である。4・5は東播系の須恵器で、4は捏鉢の口縁部である。体部が外反し、口縁端面が外側に傾斜するものである。5は鉢の底部と考えられ、外面を板状工具によってハケ目調整を施す。6は瓷器系陶器裏の肩部と思われる。上部には自然軸がかり、外面・内面ともにケズリ調整である。



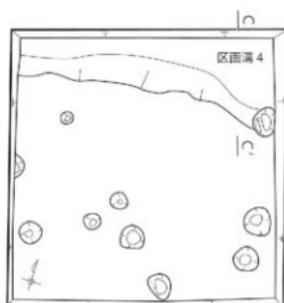
調査区 0



調査区 7



調査区 15



調査区 16



第 14 図 区画溝遺構平面図及び断面図①



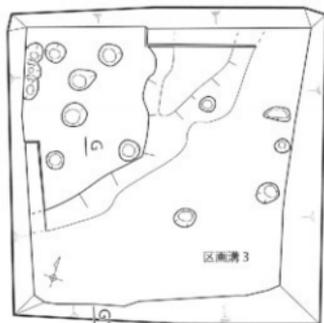
調査区 17



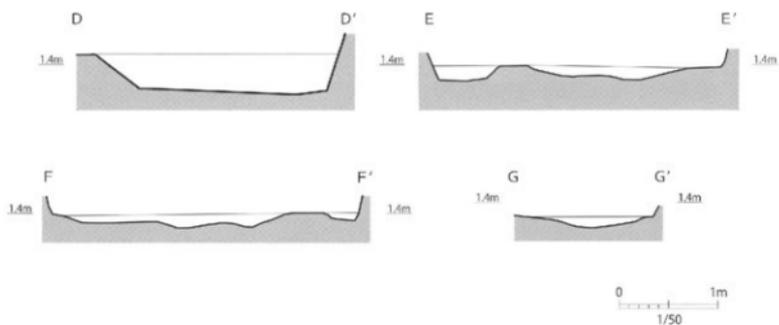
調査区 18



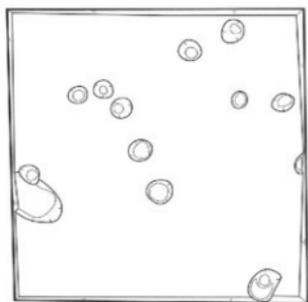
調査区 19



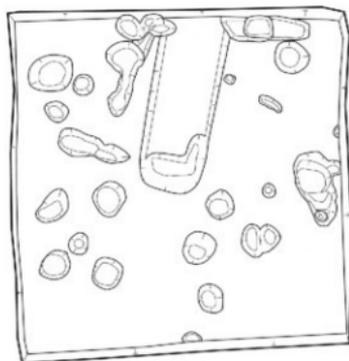
調査区 20



第 15 図 区画溝遺構平面図及び断面図②



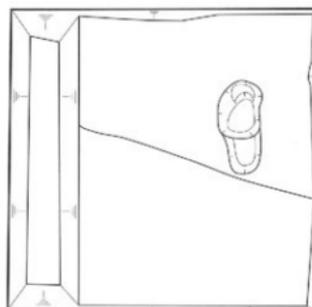
調査区 5



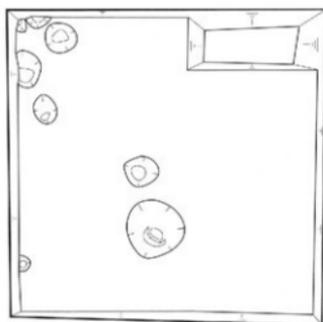
調査区 9



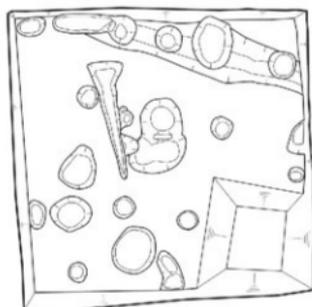
調査区 21



調査区 36



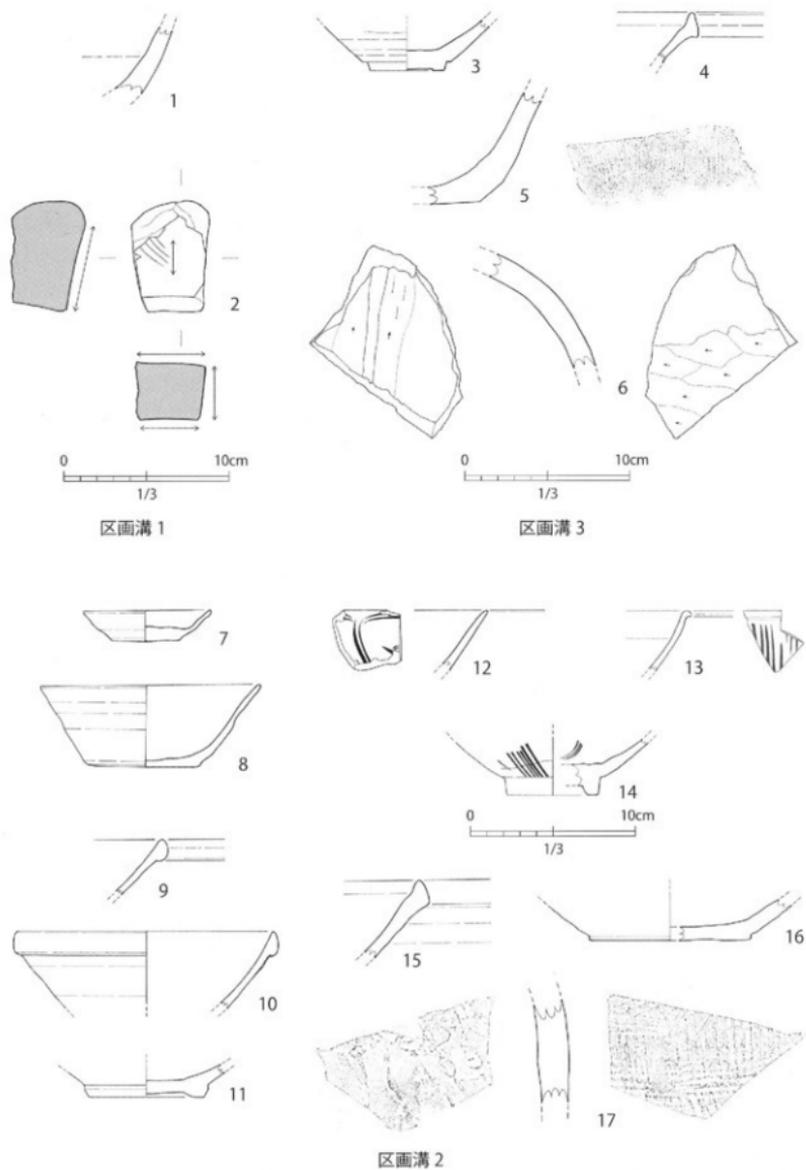
調査区 37



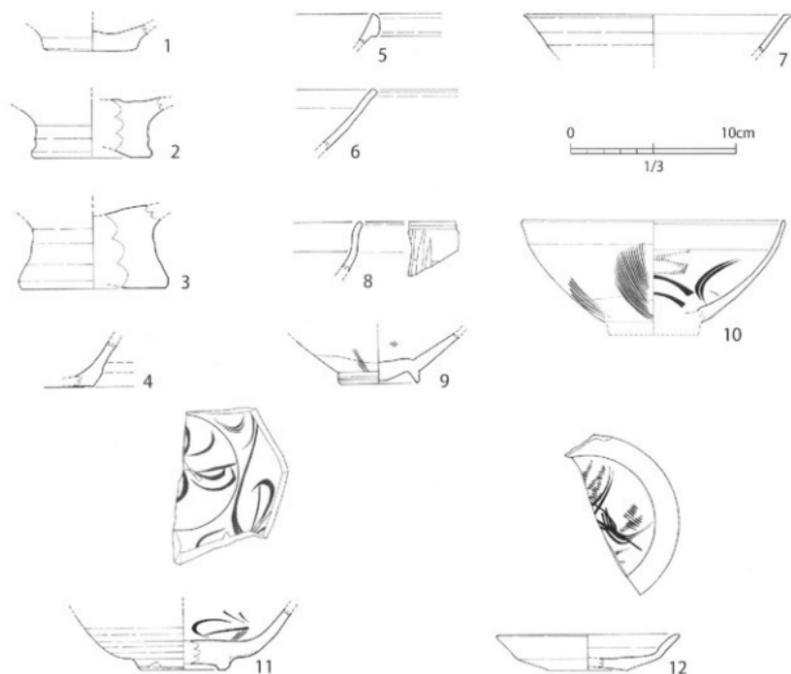
調査区 39

第 16 図 その他中世遺構平面図





第 17 图 区画满出土遗物 (S=1/3)



区画溝 4

第 18 図 区画溝出土遺物 (S=1/3)

区画溝 4(第 15・18 図)

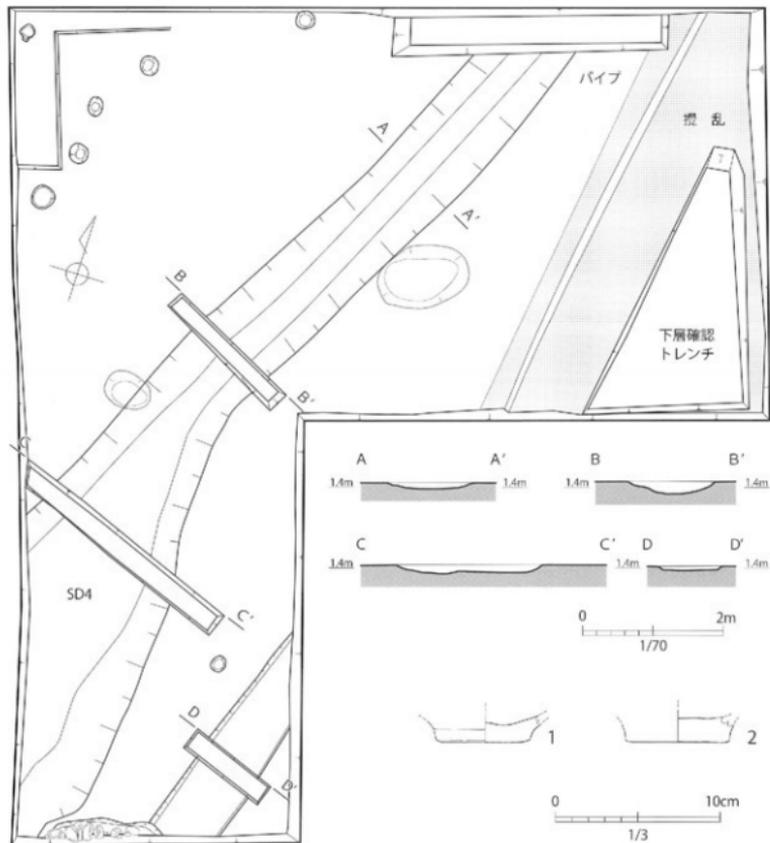
区画溝 4 は東西方向にのびる南側の区画溝である。調査区 15、21 においては南西方向へ弧状を呈しながら南下し、調査区 35、41 においては区画溝 2 と平行して南下する。幅 3m、深さ 15cm ～ 40cm で、調査区 16 以西では深さが増す傾向にある。覆土は、にぶい黄褐色土 (10YR5/3) である。

第 18 図は区画溝 4 の出土遺物である。4・6 は調査区 17、2・5・8・10・11 は調査区 35、1・3・7・9・12 は調査区 41 から出土した。1 は土師器皿、2・3 は土師器の柱状高台皿である。4 は褐釉陶器の壺底部と考えられる。5～7 は白磁碗である。5 は口縁玉緑のⅣ類、6 は口縁が直口縁で内面に 1 条の横沈線を施すⅧ類、7 は口縁が横へ屈折するⅤ類である。8～10・11 は同安窯系青磁碗・皿、12 は龍泉窯系青磁皿である。8 は口縁が外反し、外面に幅広の縦櫛目を施すⅢ類、9 は外面に細い縦櫛目を施したⅠ類の青磁碗底部である。10 は外面に細い縦櫛目を施し、体部内面に櫛状工具および篋状工具により花文を施したⅠ類である。11 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、体部内面に片切彫りによる花文が施される。12 は底部内面に篋線と櫛点描によるジグザグの文様が施された皿Ⅰ類に分類される。

SD4(第19図)

SD4は、広告塔・灯油タンク部分を南北方向にのびるもので、南北ともに調査区外へ続くことが推定される。主軸方向は現在の里道とほぼ同軸方向にのびており、さらに上面で検出された近世の道路遺構も主軸と同じくすることから、長期間この方向を指向していたことが窺われる。幅は1m、深さ10cm程度で、断面形は浅い皿状になっており、底面には硬化面などは確認できなかった。遺構の覆土は浅黄色砂質土(2.5Y7/3)で、部分的に鉄分が沈殿し赤褐色を呈する。

遺構からの出土遺物は少量だが、土師器の柱状高台皿が出土している(第19図1・2)。

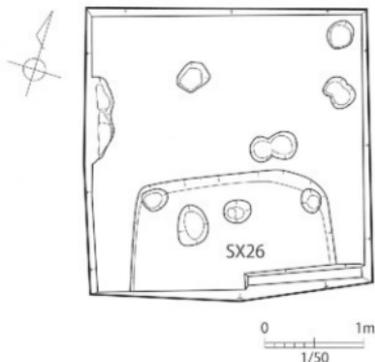


第19図 広告塔・灯油タンク 中世遺構平面図・断面図及び出土遺物

2. 方形竪穴土坑

SX26(第20図)

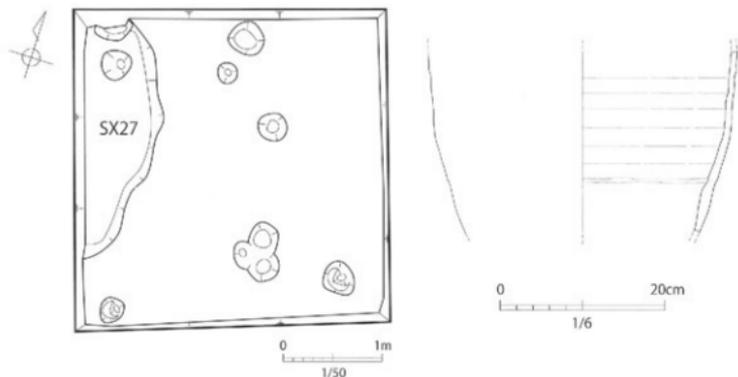
調査区 22 で検出された SX26 の掘り肩は一辺 2.0m、深さ 8～14cm で、1 間×1 間の建物規模と推定される。隅部に柱穴が検出され、柱間 (1.6m) には若干軸をずらして小規模な柱穴が確認される。遺構の覆土は、褐灰色土 (10YR4/1) と明黄褐色土 (10YR6/6) の混合土である。土師器片が少量出土したもの、時期を決定できる遺物は出土していない。



第20図 SX26 遺構平面図

SX27(第21図)

SX27 は、SX26 から南東へ約 10m 離れた調査区 31 に存在する。掘り肩は一辺約 1.8m、深さ 12cm である。SX26 に比べ平面プランが楕円を呈するが、1 間×1 間の建物規模と推定される。覆土は、にぶい黄褐色土 (10YR5/4) と灰黄褐色土 (10YR4/2) の混合土で、底面には炭を含む灰黄褐色土が薄く堆積していた。遺構からは、甕系陶器甕と鉄製品が出土した。



第21図 SX27 遺構平面図及び出土遺物

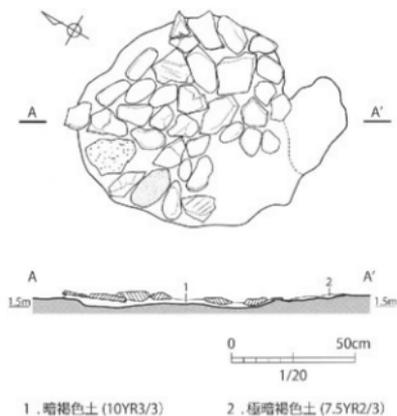
3. 集石遺構

SX6(第22図)

SX6 は、区画溝 3 に隣接する調査区 11 の南西隅に存在する。この一帯は、第 6 次調査で確認され

た区画3の中心部分と推定され、柱穴などが多数検出されている。

平面形は長軸で1.1m、短軸で85cmの楕円状を呈する集石遺構である。断面形は浅い皿状で、深さ1～4cmを測る。覆土は1層(暗褐色土10YR3/3)と2層(極暗褐色土7.5YR2/3)で、2層には炭と土師器小片を多く含む。表面には、厚さ2～4cm程度の割石と円礫を張り付ける。遺構からは土師器小片が出土したのみで、性格・時期は不明である。



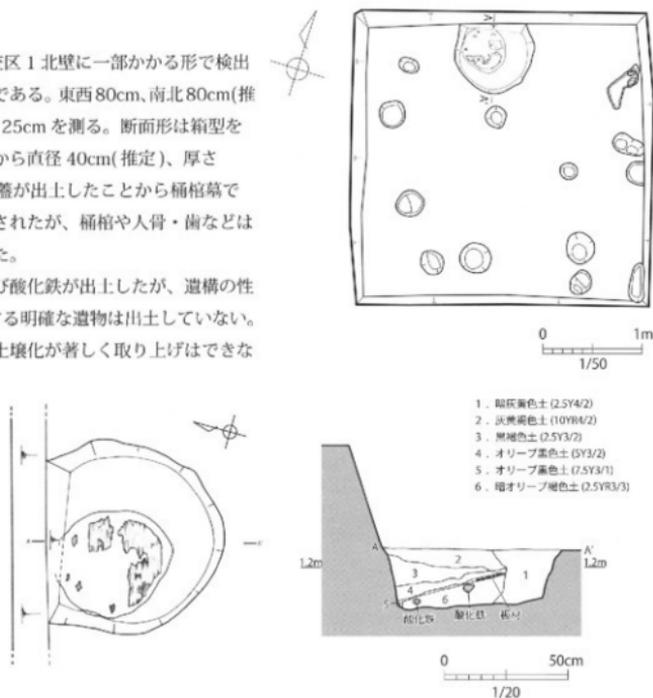
第22図 SX6遺構平面図及び断面図

4. 土坑

SX28(第23図)

SX28は、調査区1北壁に一部かかる形で検出された円形土坑である。東西80cm、南北80cm(推定)、深さ20~25cmを測る。断面形は箱型を呈する。土坑内から直径40cm(推定)、厚さ1cm程度の木製蓋が出土したことから桶棺墓であることが推定されたが、桶棺や人骨・歯などは確認できなかった。

青磁小片および酸化鉄が出土したが、遺構の性格・時期を決定する明確な遺物は出土していない。なお、木製蓋は土壌化が著しく取り上げはできなかった。



第23図 SX28 遺構平面図及び断面図

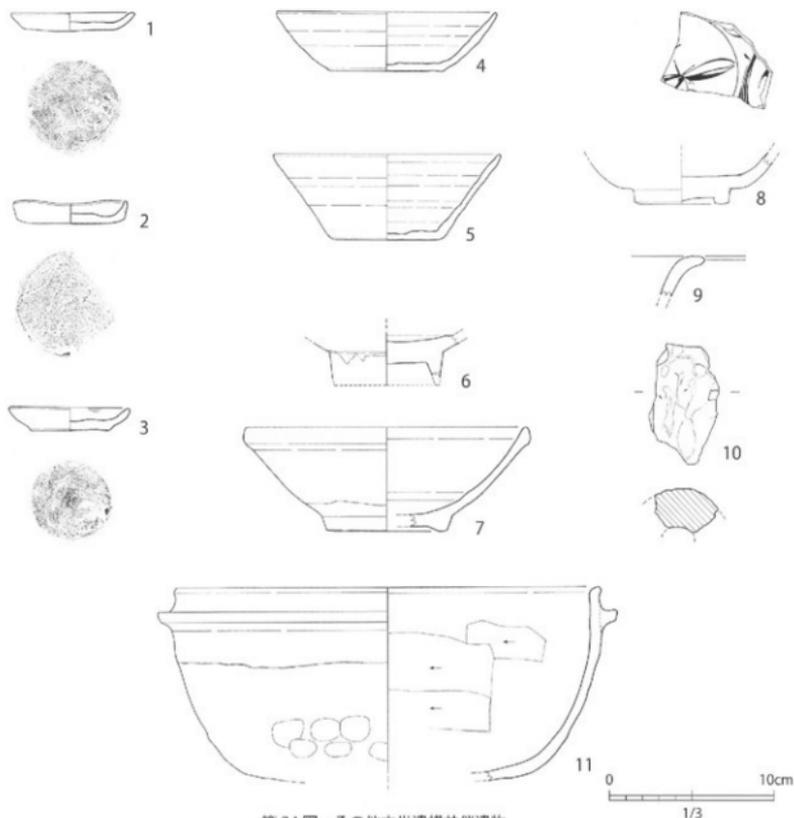
5. その他の遺構共伴及び遺構外出土遺物(第24・25図)

1~11は中世の遺構共伴遺物、12~19は中世包含層中からの出土遺物である。1・2は調査区13で出土した土師器皿で、1はSK3、2はP35に共伴する。3・4はともに調査区23からの出土で、3は口縁内面にタールが付着した土師器皿で、灯明皿と考えられる。4は土師器の坏である。5・6は調査区11からの出土で、5はP68共伴の土師器坏、6はSK10から出土した白磁碗で、断面逆台形の高い高台をもつV類である。7は調査区3P42出土の白磁碗で、口縁玉縁のIV類である。8は調査区9P363に伴う龍泉窯系青磁碗I類で、外面無文、体部内面に篋状工具で花文を施す。9は小片であるが信楽焼の壺口縁部と考えられ、調査区8P101から出土した。10は調査区12SK7出土の羽口である。断面形は円形を呈すると考えられるが、大半を欠くため送風孔の復元径は不明である。11は瓦質土器の羽釜で、調査区10P90から出土した。外面底部付近には押頭圧痕が確認でき、スガが付着する。内面は板状工具による調整が施される。取り上げ時に内面の付着物等は確認できなかったが、ほぼ完形で出土しており、地鎮に伴う祭祀に使用された可能性も考えられる。

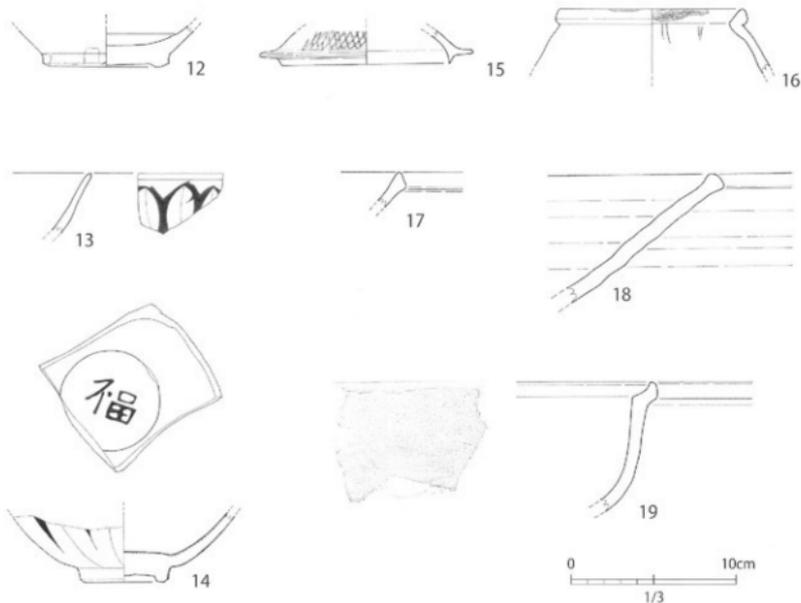
遺構外出土遺物は、12~15、16・18が調査区28から、17が調査区35から、19が調査区47

からの出土である。12は高台の削り出しが浅く分厚い白磁碗Ⅳ類の底部である。13・14は外面に鎗蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗で、14の底部内面には「福」が刻印される。15は上部につまみが付属すると思われる青磁の蓋（酒海壺の蓋か）である。外面をジグザグ状に篋切りし、内面は露胎とする。16は褐釉陶器四耳壺の口縁部と考えられ、耐火粘土による重ね焼きの目跡が残る。17・18は東播系の捏鉢である。ともに口縁部形態が、体部内面と口縁端面がほぼ直角をなすものである。19は瓦質土器の鍋で、短く外反する口縁部をもち、口縁部の下が肥厚する西長門型aになると考えられる。その他、特徴的な遺物として、調査区28で出土した和泉型瓦器碗が挙げられる（註1）。出土品は小片のため図化できなかったが、見込みで同心円の暗文が確認でき、和泉型瓦器碗Ⅲ期（12世紀末～13世紀初頭）のものと推定される。

註1 橋本久氏のご教示による。



第24図 その他中世遺構伴遺物



第 25 図 その他中世包含層出土遺物

第 4 節 近世の遺構・遺物

1. 溝跡・道路状遺構

今回の調査対象地南側では、近世の遺構・遺物が確認されている。その大半は表土中に包含された遺物であるが、調査区 14～20 ライン以南では出土量が増加する傾向が窺えた。また、調査区 33 と広告塔・灯油タンク部分では溝跡、道路状遺構が検出され、近世期を通じて活動の痕跡が認められた。

SD1(第 26 図)

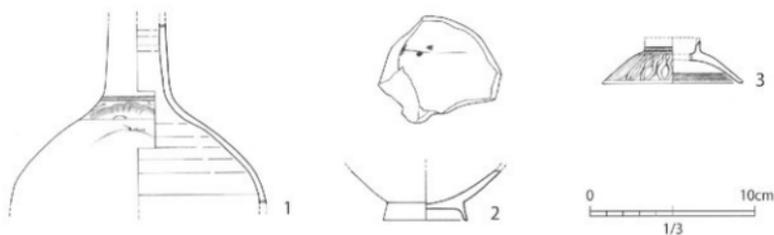
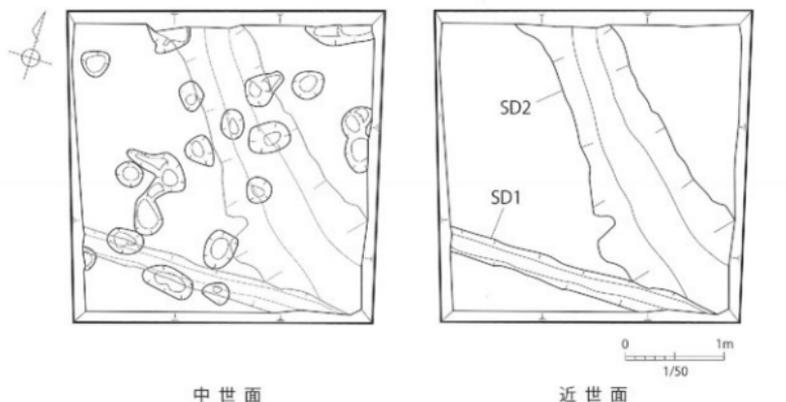
SD1 は、調査区 33 南端を東西方向へのびる幅 50cm、深さ 15cm の溝で、SD2 を切っている。溝は現在の水田畦畔の直下で検出されており、現代の擾乱の可能性も考えられる。覆土中からは近世肥前磁器小片が出土したが、時期を決定付けるものは出土していない。

SD2(第 26 図)

調査区 33 を北西から南東方向へのびる溝跡で、中世遺構を掘り込んでいる。溝は幅 75～1.2m、深さ 25cm で、断面形は皿状を呈する。溝跡が確認された範囲は限定的であるが、その位置や形状から、区画を目的とした遺構とは性格の異なるものであると考えられる。

遺構からは、多量の燻瓦(丸・平瓦、棧瓦)が廃棄された瓦溜まりのほか、九陶編年 V 期に比定さ

れる肥前系の広東碗や付盆、在地系陶器の石見焼と考えられる皿が出土している。ただし、端反碗が含まれていないことを考慮すると、SD2は、1780年代から19世紀初頭にかけての遺構と推定される。



第26図 SD1・2遺構平面図及び近世溝出土遺物

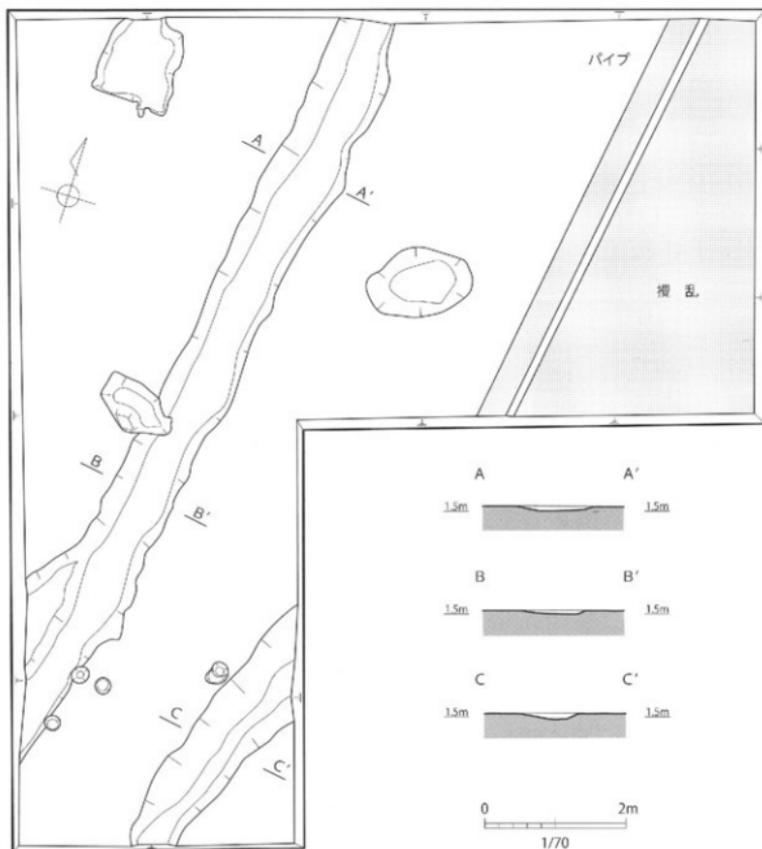
道路状遺構(第27・28図)

広告塔・灯油タンク埋設部の表土除去後に遺構精査したところ、両側に側溝を伴う道路状遺構を検出した。確認された道路状遺構は幅1.7～2.0mのもので、特に硬化面は認められなかったものの、その形状等から道路跡と考えられた。道路跡は、近接する現在の里道と並行しており、また明治初期の久城村地図にも里道としてその存在が確認できる。

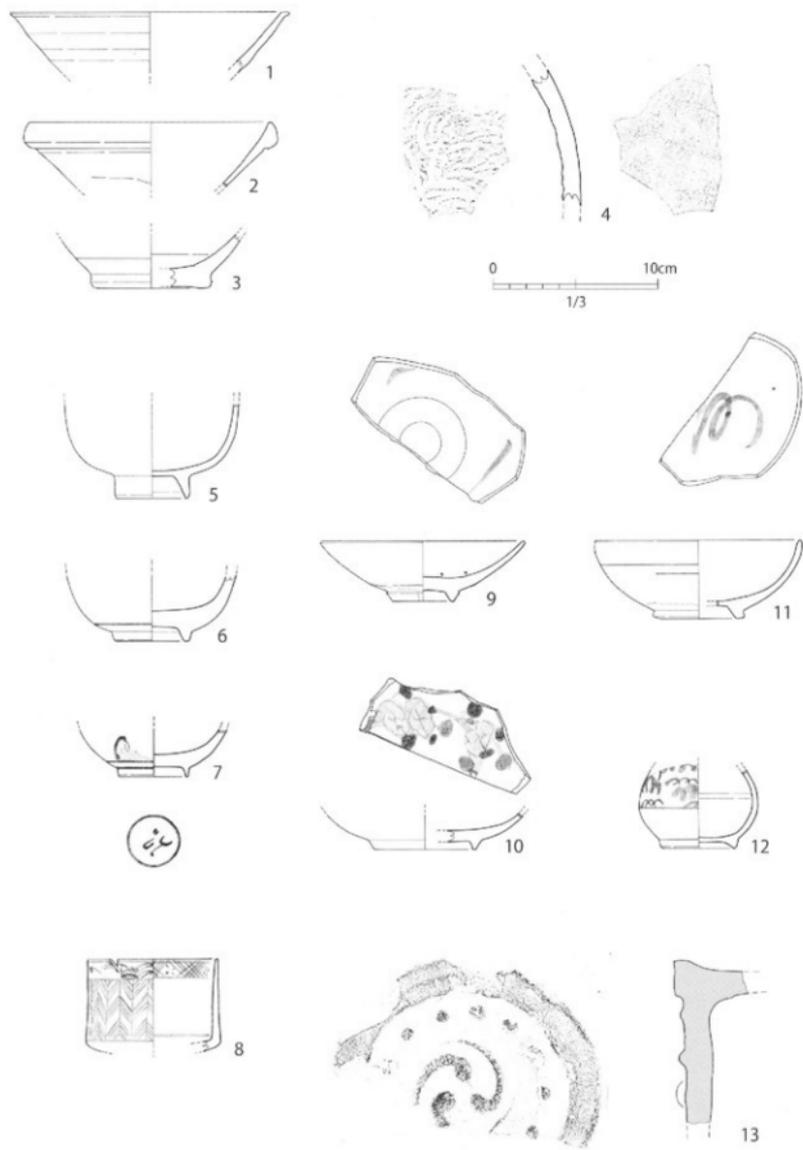
2本の側溝は幅1m、深さ15～20cm、断面形が浅い皿状を呈し、覆土は褐灰色土(10YR4/1)である。側溝埋土中からの遺物は陶磁器小片が主体であったが、表土中および近世面遺構精査時には多量の近世陶磁器、煙瓦が出土している。近世面がCL-20cm前後の比較的浅い深度で検出されていることや、側溝の深さがあまりないことから、上部が削平された可能性もある。

第28図は、広告塔・灯油タンク埋設部の包含層から出土した近世陶磁器である。先に述べたように、上部からの攪乱の影響を受けているため直接遺構に伴うものではないが、近世期の様相を反映している遺物群であるため、あえてその一部を紹介する。1～4は中世遺物で、上面からの攪乱により混入

したものと考えられる。1～3は白磁碗で、1は口縁端部が横に屈折するV類、2・3は口縁玉縁と浅い削り出しの厚い高台をもつIV類である。4は中世須恵器の甕である。近世陶磁器は、5・11が陶器、6～10、12が磁器である。磁器については全てが肥前系で、陶器では在地系の石見焼が含まれる。5は呉器手碗である。6は陶胎染付の碗、7は波佐見系のくらわんか碗である。8は18世紀後半に流行した筒形碗で、内面に四方禪文を巡らす。9は高台径が小さく、内面蛇ノ目輪割された磁器皿で17世紀中頃～後半に取まるものと考えられる。10は九陶編年IV期の磁器皿である。11は在地系陶器石見焼の皿で、底部内面に鉄絵で「寿」の崩し字が書かれる。12は磁器の瓶もしくは花生である。13は、軒丸瓦である。調査時には多量の燻瓦、僅かに赤瓦が出土したが、軒丸瓦は唯一の出土である。



第27図 広告塔・灯油タンク 近世遺構平面図及び断面図



第 28 図 広告塔・灯油タンク 包含層出土遺物

第4章 総括

今回の発掘調査では、弥生時代～近世にかけての遺構・遺物が検出された。特に、中世においては区画溝(=道路)を伴う大規模な集落が展開していたことが明らかとなった。

ここでは、下層から上層にかけて検出された遺構・遺物を概観し、若干の考察と今後の課題を述べることにしたい。

第1節 弥生時代の沖手遺跡周辺について

これまでに実施された発掘調査とそれに伴う自然科学分析により、沖手遺跡周辺における環境変化と人間活動の痕跡が明らかになりつつある。

調査区 24、30～33、38 では、弥生時代の遺構・遺物が確認され、調査区 32 において弥生時代中期末から後期初頭の溝状遺構 SD7 が検出された。今回の調査範囲は、一辺が約 3m 四方の調査区に限られたため全体像の把握には至らなかったものの、調査区 30～33 にかけては SD7 を含む連続する溝状遺構が検出されている。これらの遺構の性格については明確な根拠を有しないが、調査区 32 から約 100m 北側の第 7 次調査 3 区では、弥生時代中期中葉の溝状遺構 22 が検出されている。この溝の覆土中からイネ科の花粉が確認されている。この時期に、沖手遺跡周辺の平野部の開発が進められ、水田化していったと考えられている。さらに、CNS 分析(土中の炭素・窒素・硫黄の濃度測定)によって溝状遺構 22 の覆土は海水の影響を受けていることが判明しており、水田の排水路であった可能性が指摘される。こうした調査成果を援用するならば、調査区 30～33 で確認された弥生時代の溝状遺構は、遺跡周辺の平野部開発に伴うものであったことが推定される。

第2節 中世の沖手遺跡について

1. 遺構について

発掘調査によって確認された中世遺構は、区画溝・方形竪穴土坑・柱穴・大型土坑である。調査面積が限られたことも関係するが、建物跡の復元には至っておらず、また既往調査で検出された井戸・墓は確認されていない。

今回調査で得られた大きな成果としては、既往調査との連続性をもった区画溝(=道路)の確認により、遺跡南西端の区画(屋敷地)の規模が明らかになったことである。南北方向にのびる区画溝 1・2 と東西方向にのびる区画溝 3・4 に囲まれた北側の一面は、第 6 次調査で確認された区画 3 に該当し、南側は区画 5 に該当する。区画 3 は南北 37m(1/3 町) × 東西 52m(1/2 町)、区画 5 は南側の区画溝が確認されていないが、南北 30m 程度 × 東西 75m(2/3 町) の区画規模であったと推定される。これら地割の基本となる区画溝は、共存する遺物から、平安時代後半の 11 世紀後半から 12 世紀後半にかけて機能したものと考えられる。

区画(屋敷地)内で検出された遺構の分布状況は、区画 3 と 5 で大きく異なる。区画 3 では、柱穴跡が高密度で検出され、複数回にわたる建物の建て替えが想定される。さらに、鍛冶炉の検出には至っていないものの、調査区 10～13 の柱穴跡およびその周辺では、炭化物を多く含む薄い堆積層や鉄滓の廃棄土坑が検出されており、鍛冶関連の工房跡の存在も考えられる。一方、区画 5 は遺構分布が散在的で、遺構空白域に近い様相を呈している。区画 5 では、倉庫跡と推定される方形竪穴土坑が 2 基確認されており、第 7 次調査 4 区で指摘されているような集落内で共同利用された広場的な空間で



第 29 図 中世遺構面全体図

あった可能性が考えられる。

区画溝1・2以西では、遺構が確認されず、中世遺物を含む包含層の広がり認められた。これらは、川の氾濫によって後背地に運ばれた堆積層と考えられたが、包含層中には人頭大もしくはそれ以上の礫が投げ込まれている状況も見て取れた。こうしたことから、区画溝1・2以西一帯は河川の影響を時折受けながらも、人為的行為(耕作か)を行っていたことが推測される。

なお、寺院地名(字名)の「専福地」推定地はその一部が広告塔・灯油タンク調査部分と重複しているが、今回の調査では寺院に関連する遺構・遺物は確認されなかった。

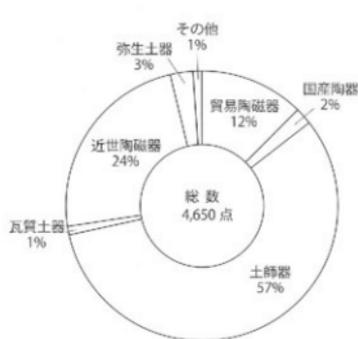
2. 遺物について

発掘調査で出土した土器・陶磁器を表2にまとめ、遺物の組成を円グラフに示したのが第30-1～3図である(註1)。

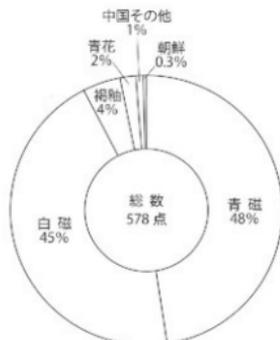
まず、出土遺物の種別構成比では、約6割が土師器で占められ、貿易陶磁器12%、国産陶器2%、瓦質土器1%である。貿易陶磁器の種別構成比は青磁48%、白磁45%となり両者は拮抗している。

第2表 沖手遺跡出土遺物集計表

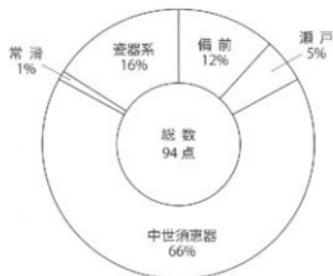
種類	器種	時期	破片数	合計	種類	器種	破片数	合計		
中国製陶器	青磁	Ⅰ	D	45	日本製品	備物	黄・磁	5		
		Ⅱ	D	46			磁鉢	5		
		Ⅲ	D	1			その他	1		
		Ⅳ	D	7			磁鉢			
		Ⅷ	F	1				11		
		B1	E	18			江戸美濃	碗	3	
		B2	H	1			磁	2		
		C2	H	1			不明		5	
		D	H-J	5			中世須恵系	黄・赤	18	
		不明		113			鉢	44		
		Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ	D			26	不明		62
		不明		11			土加器	皿	117	
		壺						坪	3	
		不明					275	鉢・鉢	15	
		白磁	筒・皿	Ⅱ			C	7	その他	3
Ⅳ	C			46	不明	2,517	2,655			
V	C			27	瓦質	鉢	13			
Ⅷ	D・E			3		磁鉢	3			
Ⅸ(A)	F			7		網・足網	3			
K	I-K			12		火鉢	2			
不明				157		その他	3			
不明					不明	23	47			
青花	碗			B	Ⅱ	1	安徳系	茶碗	黄・赤	1
				C	J	1			黄磁	15
		不明		1	不明		16			
	皿・小坪	B	J・K	1	弥生土器		126	2,922		
複製品	筒		K	7	近世以降	磁器	524			
		不明	K		陶器	577				
				11	瓦質土器		1,101			
筒				26	生陶関係	イ製法	石製	2		
火口			3	磁石		1				
その他			2	土師		18				
			31	その他		1	22			
朝鮮王朝	磁			1	会沢遺物		27			
		不明		1	その他		27			
瓦質陶磁				2						
				978	計	4,650	4,650	4,650		



第30-1図 出土遺物の種別構成比



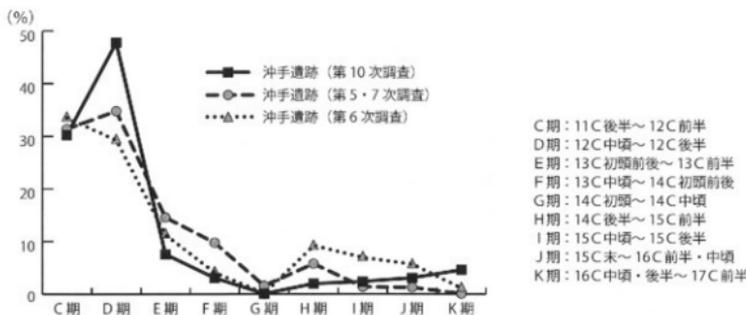
第30-2図 貿易陶磁器の種別構成比



第30-3図 国産陶器の種別構成比

次に多いのが褐釉4%で、青花2%と続くが少量である。国産陶器では、中世須恵器が66%と圧倒的に大半を占め、瓷器系が16%である。その一方、備前12%、瀬戸5%と中世後半を中心とする国産陶器が低い割合を示している。既往調査との比較では、総出土数に占める貿易陶磁器の比率は第6次調査9.3%、第5・7次調査11%、第9次調査12%となり、第10次調査箇所は沖手遺跡全体の中で貿易陶磁器の比率が高い場所といえる。国産陶器にみる比率では、第6次、第5・7次、第9次調査では、備前が最も多い比率を示し、中世須恵器と瓷器系が続く。しかし、第10次調査では中世須恵器が6割と主体を占め、中世後半を中心とする備前が1割と低い比率にとどまっている。

次に、遺物の出土傾向を時期別に概観する。白磁では11世紀後半から12世紀前半(山本編年C期)のIV類が46点で最も多く、V類が27点、II類・VIII類・IX類がわずかに確認できる。青磁は、D期を中心とする同安窯系青磁が60点、龍泉窯系青磁が45点で、D期でも占段階に位置付けられる同安窯系が龍泉窯系を上回っている。E期からは出土数が極端な減少傾向をみせるが、G期以降はわずかながらも緩やかに増加傾向となる。しかし、C～D期のピークほどの盛期を迎えることはない。既往調査との時期別出土比率を折れ線グラフにしたものが第31図である。大きな相違点は、D期にかけての増加



第31図 沖手遺跡の貿易陶磁器時期別出土比率

が顕著で、その中心が同安窯系青磁に占められている点である。また、第6次、第5・7次、第9次調査では14世紀後半から15世紀前半のH期に小規模な盛期がみられるのに対し、第10次調査では盛期を迎えることなく、青磁の雷文(C2類)や端反(D類)、青花がわずかに増加していく。ただし、白磁については型式を同定できなかった不明品が259点あり、今後精査を行うことで11世紀から12世紀中葉にかけての破片数はさらに増えるものと思われる。

第3節 近世の沖手遺跡 —浜田藩専福地浦番所について—

調査対象地南側の字名「専福地」は、浜田藩の専福地浦番所推定地である。調査区28～34ライン以南では近世の遺構・遺物が確認された。特に、広告塔・灯油タンク部分では、近世の道路跡が検出され、多量の陶磁器・瓦片が出土した。これらの遺物は、陶磁器の量や瓦片の存在から浦番所に関連する遺物群と考えられるが、包含層中からの出土が大半で、浦番所に直接結び付く遺構は確認されていない。遺構面が比較的浅い深度で検出されていることから、上部が削平された可能性も考えられる。しかし、出土した陶磁器から、ある程度の様相は把握できる。近世遺物から示される時期は、17世紀中頃から19世紀前半までの時間幅を有する。最も上限に位置付けられる遺物は九陶編年Ⅱ期の磁器皿で、17世紀中頃である。その後も、Ⅲ期の呉器手碗が17世紀後半にかけて一定量認められる。まとまった出土がみられるのはⅣ期からであり、陶胎染付碗やくらわんか碗、筒形碗、陶器では須佐焼すり鉢がまとまって出土する。Ⅴ期では、広東碗や付蓋に加え、在地系陶器の石見焼皿も出土している。ただし、端反碗は存在しない。以上のことから、19世紀前半には終焉を迎えたと考えられる。

第4節 調査地点の位置付け

遺構・遺物から得られた調査成果をもとに、沖手遺跡での今回調査地点の位置付けを行いたい。出土遺物から示される調査地点の最も中心となる時期は、11世紀後半から12世紀後半(C期～D期)と考えられる。しかし、既往調査と比較して若干古い様相を呈する。また、その後は盛期を迎えず近世に至る。

土地利用の在り方は、区画3で柱穴跡など遺構密度が高いことに比べ、南側の区画5では遺構が散的で、居住地というよりは集落の広場的な空間であったことが考えられる。区画溝1・2以西は、

比較的水際に近い後背湿地であり、耕作地としての土地利用が想定される。今回の調査地点は、沖手遺跡南西端の河川にほど近い部分と考えられ、その立地や出土遺物から遺跡内でも比較的早い段階に開発されたことが窺える。また、推測の域を出ないが、区画5は確認された倉庫跡や遺構密度が薄い状況を示すことなどから、交易品を一時的に保管する場所、もしくはは交易、流通品を扱う広場の空間として利用されたのかもかもしれない。

沖手遺跡は、益田川・高津川の河口に広がる河川周辺の低湿地に面し、既往調査で威信財等が出土していることから、日本海や益田川・高津川の水運を利用して益田平野や内陸部、国内外の遠隔地とを結ぶ交易、流通の拠点として機能した遺跡である。このような流通拠点としての沖手遺跡を考える上で、調査区28で出土した和泉型瓦器碗の存在は注目される(註2)。このような搬入品の存在は、沖手遺跡が流通拠点として機能した集落遺跡であることを裏付けるものである。

沖手遺跡については、今回調査も含め11次におよぶ調査が実施され、遺跡の規模・性格も徐々にではあるが明らかになりつつある。益田川・高津川河口域で発見された沖手遺跡、中須東原・西原遺跡、中世今市遺跡へと続く港湾遺跡群の変遷と、流通拠点としての役割に関する調査研究を進めていく上でも、沖手遺跡の調査区毎の成果を総合的に検討・評価していくことは今後の重要な課題である。

註

- 1 型式分類は、山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一2000、小野正敏1982、森田勉1982、上田秀夫1982の分類・編年を参考として行った。
- 2 島根県内での畿内産瓦器碗の出土は、石台遺跡(松江市)と出雲国府跡(松江市)の2遺跡で確認され、いずれも出雲部に限られている。

一般的に畿内産瓦器碗は非広域流通品であり、その流通域は畿内を中心とする。しかし、近年では、瀬戸内や北部九州の物資流通の拠点的な遺跡でも出土が確認され、流通や隔地間交流を知る重要な要素となっている。12世紀後半～13世紀前半(山本編年D・E期に相当)において、主にⅢ期の和泉型瓦器碗が沿海部に広く分布する(橋本2010)。なお、沖手遺跡出土の瓦器碗は和泉型Ⅲ期のもので、調査地点における貿易陶磁器のピークの12世紀中頃～後半(山本編年D期)にあたる。

参考文献

- 岩崎仁志 2007 『山陽西部における中世の土製煮沸具—周防・長門を中心に—』『中世土器の基礎研究』21
日本中世土器研究会
- 上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』№2 日本貿易陶磁研究会
- 松本岩雄 1992 『石見地域』『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
- 森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』№2 日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市教育委員会
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 島根県教育委員会 2008 『沖手遺跡 専光寺脇遺跡—一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』
- 益田市教育委員会 2010 『沖手遺跡』市道中吉田久城線道路改良工事に伴う文化財発掘調査

图 版

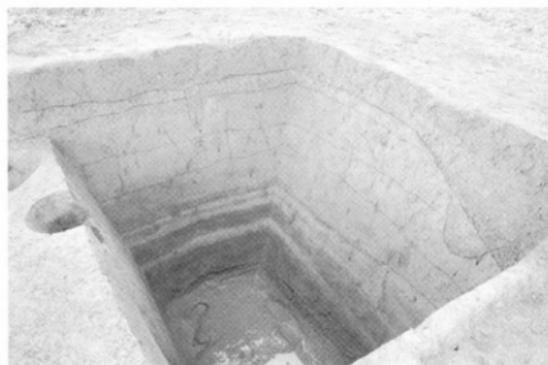
図版 1



調査前の状況



調査区 4 土層堆積状況
(西壁)



調査区 10 土層堆積状況
(北・東壁)

調査区 15 土層堆積状況
(南壁)



調査区 25 土層堆積状況
(北・西壁)



調査区 29 土層堆積状況
(北壁)





調査区 38 土層堆積状況
(北壁)



調査区 42 土層堆積状況
(西壁)



調査区 44 土層堆積状況
(西壁)

調査区 31 第 2 遺構面 (弥生)
SD5・6



調査区 32 第 2 遺構面 (弥生)
SD5・7



調査区 33 第 2 遺構面 (弥生)
SD7・8





調査区 0 区画溝 1・2



調査区 7 区画溝 1・2



調査区 15 区画溝 4

調査区 18 区画溝 3・4



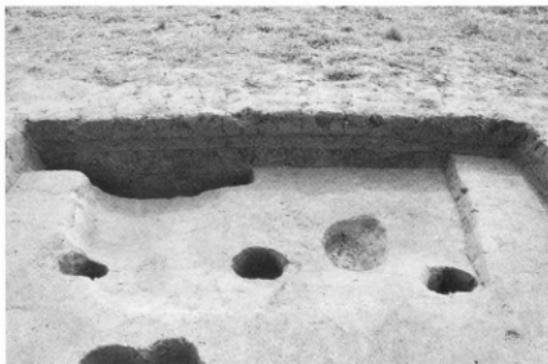
調査区 19 区画溝 3・4



調査区 35 区画溝 4



図版 7



調査区 22 SX26
方形竪穴土坑



調査区 31 SX27
方形竪穴土坑

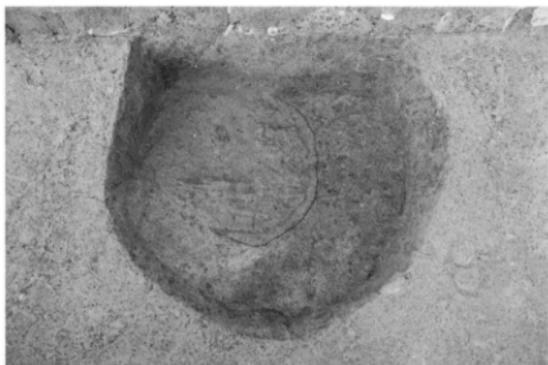


調査区 31 SX27
遺物出土状況

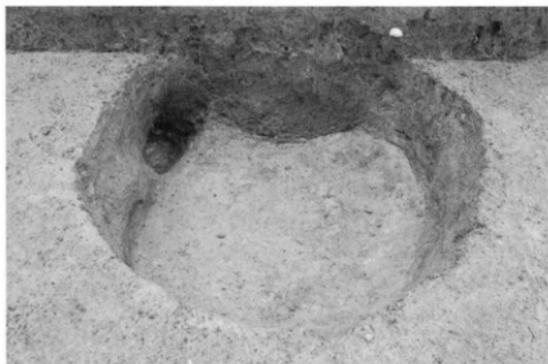
調査区 11 SX6 土層



調査区 1 SX28
木製蓋検出状況



調査区 1 SX28 完掘





調査区 19 近世石列検出状況



調査区 20 近世石列検出状況



調査区 33 近世SD1・2



土師器 (坏)



区画溝1・3出土遺物



区画溝1・3出土遺物



区画溝2 出土遺物



区画溝2 出土遺物



区画溝 4 出土遺物



区画溝 4 出土遺物



その他中世遺物（遺構共伴）



その他中世遺物（包含層）



瓦質土器 (羽釜)



瓷器系陶器類



近世遺物



近世遺物



肥前系磁器 瓶



軒丸瓦



瓦器碗 (和泉型)



13-1

13-2

弥生土器



※写真のみ掲載



※写真のみ掲載



※写真のみ掲載



※写真のみ掲載

鉄製品・鍛冶滓

報告書抄録

ふりがな	おきていせき							
書名	沖手遺跡							
副書名	ホームプラザナフコ益田北店開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	佐伯昌俊							
編集機関	益田市教育委員会							
所在地	〒698-8650 鳥根県益田市常盤町1番1号 Ⅱ0856-31-0623							
発行年月日	2014年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沖手遺跡	鳥根県 益田市 久誠町	32204	Q271	34° 41' 36"	131° 50' 29"	20130801 ～ 20131122	890 ㎡	民間開発事業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
沖手遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 江戸時代	道路遺構、溝状遺構、 掘立柱建物跡、方形竅 穴土坑、集石遺構、土 坑	弥生土器、土師質土器、中世須恵 器、瓦器碗、瓦質土器、貿易陶磁 器、国産陶磁器、金属製品、鉄滓			中世の大規模集落遺跡	

沖手遺跡

ホームプラザナフコ益田北店開発事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 26 年 3 月発行

編集・発行 益田市教育委員会
島根県益田市常盤町 1 番 1 号
印刷 のさか印刷
島根県益田市高津五丁目 28 番 8 号

